

## 妻としての女性

女性が普通の道を行けば妻となる。

享楽気分ならば妻とならぬがいい。

妻になることは新しい苦への行進であるかも知れぬ。

しかし享楽は人生の本義ではない。自分自身を実現するためには苦の中にも幸福がある。

娘時代は花時である。花が男性の家に移される。決して昔のように女を奴隷の如く考へてはならない。奴隷の如く甘んじてはならない。妻は妻であつて人形ではない。イプセンの「人形の家」の思想は女性に大きなショックを与えた。

現代婦人は、何処かにノラの血を持っている。人形は他によつて生かされたので、自分を持たぬ。

しかし人格尊重をはきちがえて、もし女性が女性を失つて、妻が妻でなくなる時、それはあなた自身の破滅です。妻は永遂に妻であつて、夫ではない。体質がちがひ、心がちがう。如何に世の中が進んでも妻である事は永遠に女性の恥辱ではない。

玉経を開いて積尊に聞こう。玉耶は嫁して婦の道を守らず、怠惰に、嬌慢に暮して、一家の人たちを苦しめた。彼女はある日、積尊の御出でによつてねんごろに女の道を開かされた。その中に七婦の説がある。

### 一、母婦

母のような妻である。夫を愛念し昼夜忘れず、常に左右に侍して倦み疲れることなく、朝夕の飲食をば心を尽くして供養し、四時の衣服は意を用いて供給し、夫が人のために軽んじられはしないかとそれを恐れること、まるで母が子を憶ふようにする妻である。夫が強い男性であつたらいりもすまい。しかし相手によつてはあなたは母のような立場に立たねばならぬかも知らぬ。夫が駄目だからと言つて捨ててかえる婦人がある。それでは夫婦は立身が第一条件か。

### 二、妹婦

夫に事えて誠敬をつくす様は兄弟に對することく、血をわけた者さえかなわぬ真情がこもる。疎んじたり、隔てたりする心が微塵もない。

妹婦になれといつても、甘えておれというのではない。夫が悪戦苦闘する日もある。妹のようにそれを扶ける。あの夫婦は兄妹だろうか。飾らずいつわらぬままに夫婦の間に敬愛と、苦のただ中にも樂園をつくる。

### 三、師婦

夫に事へてただ恋々として相遠ざけることが出来ない。夫が道をあやまりそうな時、灰かに諷し諫めて、其の缺行をなないように心がけ、善言嘉謀をばひそかに誨えて、

夫の成功をたすけ、過を改めて善に遷らし、暗を去り、明につかしめること、丁度、師が弟子を導くにも似ている。

#### 四、友婦

夫に事ふるに愛敬を以てし、己を修むるに節義を以てし、口に過の言葉なく、身にも過のなきことを心がけ、善は推して夫にゆずり、過は進んで自分が受け、義理をおかず、退きて礼を失わず、常に和して相助くることは、まるで親友の如くするを友婦という。

#### 五、婢婦

心常に慎み畏れて、あえて夫と争わず、はやく起きおそく臥して、如何に忠をつくすも猶足らず、謙遜に身をもつて放逸の行なく、口は柔軟に、あらましの言葉なく、如何に寵愛を受けても驕らず、愛を失うとも怨む念いなく、むちうたれても怒らず、辱しめらるるとも甘んじて恨みず、苦楽、榮辱によつて心を二様にしない。これが婢婦である。

夫の人格や学徳はあまりにも高い。自分の至らないことが見える。婢のような態度で仕える。こうした妻も尊い生活である。

#### 六、怨婦

夫を見れば心よろこばず、相對すれば、鬪諍して更に畏れはゞからず、昼夜瞋恚の心をいだいて恒に離別しようと思い、夫婦生活はまるで寄寓の如く、生業を務めず、子供を見ることが他人の如く、養育しようともせず、心は放埒で、身は淫蕩、親を辱め、夫を汚す、夫が呵責すれば則ち呪つて死ねかしと念う。こうした婦を怨婦と言う。

こうまで揃つた女もあるまい。しかしこの怨婦の血が一滴もはたしてないであらうか。

#### 七、賊婦

晝も夜も毒心をもつて夫をつけねらい、つくづく思うには、如何なる方法によつて夫と離別しようか。どんな手段をとれば夫の財産を奪うことが出来ようかと考え、終には間夫とはかつて、隙をうかがつて殺させ、夫が死んだ時、財産を奪つて他の男の妻となる。こうした女を毒婦というのである。

昭和の今日でも時にこうした女がある。私はただ女子の修養のみをいうのではない。怨婦があれば怨夫がある。毒婦があれば毒夫がある。女が悪いことが男が悪くていいという口実にはならぬ。男が悪いからとて女が道を守らなくてもいいという理はない。

夫婦生活はこれ地上の社会国家の根源である。自由恋愛とか結婚の改善とかいうも、要は、より美しい人生を建設しようとするのではないか。特別の事情ある女性は独身もゆるさねばならぬ。しかし常道が結婚にあることを思う時、妻としての失敗は時に人生そのものの失敗である。